

## 資料紹介

## ロシアにおける J. S. ミル

—明治の日本との対比において—

杉原四郎

§ 1 J. M. ロブソンを編集者として1965年秋に創刊された『ミルニュースだより』<sup>1)</sup>は、「J. S. ミルを中心とする19世紀の研究の情報交換所を提供する」ことを主たる目的とする雑誌で、毎号従来のミル研究文献が著者名のアルファベット順に整理されて連載される (Vol. IV, No. 1, Fall, 1968 で A-O まで終わった) 他に、ミルに関する新しい研究や資料の紹介、書評およびロブソンが編集主任のトロント大学版『J. S. ミル著作集』の進行状況などが掲載されており、約20~30ページの小冊子ながらなかなか読みごたえがある。原則として一年に春秋二回出るのが、ロブソンの病気のため Vol. III, No. 1 が1867年秋に出てから一年ぶりに Vol. IV, No. 1 が昨秋刊行された。その巻頭をかざっているのがここに紹介しようとする J. P. スカンランの「ロシアにおけるジョン・ステュアート・ミル。文献目録」<sup>2)</sup>なのである。D. L. ハスコールとロブソンの協力で連載中の詳細なミル研究文献目録もロシア語の文献はカヴァーしていないし、われわれ日本のミル研究者にとってもまた、チェルヌイシエフスキーによるミル研究の紹介には接している<sup>3)</sup>ものの、1861年の農奴解放前後から今世紀にかけての近代ロシアの展開過程の中で、ミルの思想がどのように導入され、それがどのような影響を与えたかについてははなはだ不案内である。ところがスカンランの一文は、この時期のロシアにおけるミルのうけ入れられ方についての要領のよい展望を与えるのみならず、筆を現在のソヴェトにおけるミルにまでのばし、ミル導入史を通じてロシアの思想界の特性にまでふれようとしており、それにつけられたミルの著作のロシア語訳およびロシア語のミル研究文献についてのリスト<sup>4)</sup>とともに、この分野についての有益なインフォメーションを提供してくれている。あえて紹介の労をとった所以である。以下、ロシアとは約10年おくれ、1870年代からミルの導入がはじまったわが国との対比を念頭におきながら、スカンランの敘述の要旨をたどってゆくことにしよう。

- 1) *The Mill News Letter*, edited by John M. Robson, published by University of Toronto Press in association with Victoria College.
- 2) James P. Scanlan (University of Kansas), John Stuart Mill in Russia: A bibliography. *The Mill News Letter*, IV, 1, pp. 2—11.
- 3) たとえばチェルヌイシェフスキー、西沢富夫訳『J. S. ミル、経済学原理』への評解』上、岩波文庫、1951、中・下は未刊。なおチェルヌイシェフスキーがこの『評解』を公表する直前に同じ雑誌『同時代人』（1860年1月号に）掲載した論文「資本と労働」が石川郁男氏によって翻訳されている（未来社「社会科学ゼミナール」33, 1965）が、その中でも彼はそのミル観を端的に表明している。石川訳『資本と労働』pp. 75—76 を参照
- 4) 天野敬太郎氏の J. S. ミル文献目録 (*Bibliography of the Classical Economics*, Vol. 3, Part 4, John Stuart Mill. Science Council of Japan, 1964)——これは *The Mill News Letter*, Vol. I, No. 1, pp. 6, 17 にも紹介されている——には、ミルの諸著作のロシア語訳が12、ミル研究のロシア語文献が7、合計19点リストされているが、スカンランの目録はそれよりずっと多く、Russian Translations of Mill's Works が23, Russian Works on Mill が34, 合計57点があげられている。34点のミル研究文献のうち4点がソ連のもの、30点がそれ以前のものであり、後者の中には、後掲のバックル、ステイーヴンや、ブランデス、テース、ゼンガーのような外国人の研究文献のロシア語訳が5点ふくまれている。

§ 2 スカンランによれば、ロシアは1860年代にミルを「発見した」。この10年間にミルの著作の大部分はロシア語に翻訳され、彼の影響は19世紀のロシアの代表的思想家たちの多く的心をとらえるまでにひろまった。1825年から1855年まで在位したニコライ一世が自由主義思想の西欧からの渡来を厳しく取締っていたのに対して、彼の跡をついだアレクサンドル二世の時代には、思想統制がかなりゆるめられたので、外国の書物の輸入も国内での普及も可能になり、同時に国内に急進思想が成長していったのだが、そうした新しい動きを代表するチェルヌイシェフスキーやラヴロフのような人々が興味をもった西欧の思想家の1人がミルだったのである。もっとも彼らはミルの自由主義にはあきらまず、むしろプルードンやマルクスにヨリ強くひかれていった。しかしミルの著作をロシアの人々に紹介したのは彼らであり、アレクサンドルの自由主義が冷却する<sup>1)</sup>につれて思想統制が強化されるという事態に反対して、ミルの思想をロシアに普及することにつとめたのも彼らであった。

以上の序論の後にスカンランは各論に入り、ミルの著作を『経済学原理』、『論理学』、『ハミルトン哲学批判』、『コントと実証主義』、『代議政治論』、『論文集』、『功利主義』、

『婦人の隷従』の順序でとりあげ、最後に『自由論』を問題にする。まず『経済学原理』(1848)であるが、これはミルの著作の中で最初にロシア語に翻訳されたものであり、かつその後ロシアで最も長期にわたって影響をあたえたものであった。チェルヌイシェフスキー(1828～1889)は『経済学原理』第1篇の翻訳を詳細な注釈をつけて1860年に公刊<sup>2)</sup>(その後1905, 1937および1949年に出版された彼の著作集にも採録)し、翌1861年には彼の活動舞台であった雑誌『同時代人』に6回にわたって「経済学概説(ミルに依る)」を連載した<sup>3)</sup>(その後1870にジュネーヴで出た著作集ならびに1905, 1935～1937, 1949にロシアで出た著作集にも収録)。「彼はその注解でミルをブルドンにつくりかえようとつとめている」という同時代人の言葉がしめすように、彼は自己の社会主義的見解をひきたせるためにミルの経済学を利用したのであり、こうした見解はロシアの内外の急進思想家を鼓舞したのだった。だが19世紀のロシアの思想界に—そう広汎な影響をあたえたのは、彼の注解よりはミルの『原理』そのものであった。チェルヌイシェフスキーによる『経済学原理』の完訳は検閲のため彼の注解なしで1865年に公刊され、1874年に再版が出たが、再版のときには注解が極端に圧縮されて追加されることが可能となった。しかし1884年にはアレクサンドル三世がチェルヌイシェフスキーの翻訳の閲覧禁止を図書館に命じ、かつその増刷を禁止している<sup>4)</sup>が、これは当時のロシアにおける『原理』の影響力の強さを逆に表現したものとみえるであろう。1880年代から90年代にかけて、こうした圧迫にもかかわらず、『原理』は経済問題に関するマルキストとその反対者との間の活発な論争の中で双方の陣営の人々によって広く読まれたのであって、検閲官にうけ入れられるようなかたちでの『原理』の二つの新訳が1895年と1897年に出されたこと<sup>5)</sup>、またブンゲ、ロズデストヴェンスキー、ツガン・バラノフスキーのような当時の代表的な経済学者たちが、いずれもミルの経済学についてのモノグラフィーを出版していること<sup>6)</sup>からも、当時のロシアにおけるミル経済学の支配的地位をうかがうことができるであろう。

- (1) 1861年2月19日の農奴解放令から翌62年の前半期にかけての民衆運動の高揚に対して、62年の夏からきびしくなった弾圧は、1863年のポーランド反乱を機に一層強まり、1866年のアレクサンドル二世襲撃事件で反動化は決定的となる。チェルヌイシェフスキーは1862、ラヴロフは1866年に逮捕され流刑。
- (2) スカンランの文献目録では、単行本のかたちで Vol. I. St. Petersburg : K. Vul'f, 1860. 426 pp. として公刊されたとのみ記されているが、これは1860年に雑誌『同時代人』に連載されたものをとりまとめたものである。前掲西沢富夫訳『評解』pp. 338～339を参照。

- (3) これはつぎのような標題で1869年に単行本として刊行された。Chernyshevsky, N. G., *Dopolneniya i primechaniya na pervuyu knigu politicheskoy ekonomii Dzhona Styuarta Millya*. Geneva: M. Elpiden, 1869. 276 pp. (以下ロシア語文献や人名の表記はすべてスカンランにしたがう。)マルクスはこれをペテルブルクのダニエルソンから送ってもらってよみ、その内容を高く評価した(マルクスのダニエルソンあての1871, 6. 13の手紙, Marx-Engels, *Werke*, 33, S. 231)が、周知のように彼はこの著作に『資本論』第二版後記でも言及している。*Werke*, 23, S. 21. マルクスがロシア語の勉強をはじめたのはチェルヌイシエフスキーの経済学の著作に親しむためでもあったことについては、彼のS. マイアーあての 1871, 1. 21 の手紙を参照。*Werke*, 33, S. 173.
- (4) 島田三郎はその著『世界之大問題社会主義概評』(1901)の中で「露国虚無党」をとりあげ、その中でこの点にふれてつぎのように評している。「先帝アレキサンドル三世の時、図書館備附を禁ぜる書目中に、ライエルの地質書、アガツシーの博物書、ミルの政治経済書、スペンサーの哲学書、アダム・スミスの経済書もありき。我国人は銀座小川町等の書店にも、容易に得らるべき書籍が、露国の禁書たるを聞かば、其文明が如何に陽光を受けざる草木の如く、萎凋して生色なきの悲況を想ふべく、又其湿润の氣中に黴菌の充満するを察すべし」(p. 82)。
- (5) Alexander Miklashevky の手になる1895年版(Moscow, lxxiv, 342 pp.)の底本は、1889年にパリで *Petite bibliothèque économique française et étrangère* の1冊として出たフランス語の縮約版、1897年版は O. I. Ostrogradsky の編集、Ye. I. Ostrogradskaya の翻訳で、Kiev, xvii, 866 pp. 我が国でも林董、鈴木重孝訳『弥兒経済論』(1875~1886, 『原理』の第4篇まで)よりもラフリン(J. L. Laughlin)の縮約版(1884)の天野為之による邦訳(1891)によって普及した。ミルの『原理』がわが国の経済学界に長く影響したことについては、シンポジウム「経済学史の原点を顧みて」、『経済学史学会年報』No. 3, 1965, pp. 18~32 を参照。
- (6) ブンゲの「経済学者としてのミル」は『国民教育省雑誌』の1868, Part 140, pp. 1~100に掲載、1895年に公刊された彼の『経済学文献論集』に収録された。なお同じ雑誌の1874, Vol. 175, pp. 112~51には、Vladislavlev, M., “Dzhon Styuart Mill”が掲載されている。他の二人の著作はつぎの通り。Rozhdestvensky, M. N. *O znachenii Dzhona Styuarta Millya v ryadu sovremennykh ekonomistov*, St. Petersburg: Ye.Prats, 1867. 97 pp. Tugan-Baranovsky, M. I., *Dzhon-Styuart Mill. Yevo zhizn' i uchono-literaturnaya deyatel'nost'*. St. Petersburg, 1892. 88 pp. ツガンのこの著書におけるミル評価がマルクスのそれと対照的なものであることについては、つぎの文献を参照。Kindersley, R., *The First Russian Revisionist*. 1962, pp. 55~56.

§ 3 ロシアの思想界に長く影響したミルの他の著作は『論理学』である。スカンラン

によれば、経済学におけるチェルヌィシエフスキーにあたる役割りをこの面で演じたのがラヴロフであって、「個性論概説」という1859年の彼の哲学的な論文<sup>1)</sup>は、1860年代のはじめにミルをロシア人に近づける上にあづかって力があつた。彼は1865～1867年に『論理学』の最初のロシア語訳を編集しこれに注解を加えたが、このラヴロフ版<sup>2)</sup>は大いに世に迎えられ、1878年に再版された。『論理学』のロシア語訳の他の版は19世紀末から今世紀初頭にかけて二種刊行され、その最後の版は1914年に出ている。こうした『論理学』のロシアへの導入とと普及は、ミルの『ハミルトン哲学批判』(1865)の翻訳(1869)や『コントと実証主義』(1865)の翻訳(1867, 1897)とともに、ミルの経験論にロシア人を親しませる上に著しい効果をあげたので、ロシア思想史家たちは、1860～70年代にロシアで盛んとなった実証主義の風潮の重要な一源を、このようなミルの諸著作にもとめているほどである<sup>3)</sup>。チェルヌィシエフスキーやラヴロフの他に D. ピーサレフ や N. ミハイロフスキーなどの人々はすべて多かれ少なかれ実証主義の風潮にそまっていたし、ミルの論理学や認識論の著作をよむことが、多数のロシアの哲学者たちの知的発展の中のすくなくも一段階をなしていた。そしてこのようなミルの仕事は、たとえば論理学者 M. カリンスキーの研究のような、ロシアの学者によるすくなくからめ批判的反響をも生み出した<sup>4)</sup>。

- (1) Lavrov P. L. "Ocherk teorii lichnosti," *Otechestvennyye Zapiski*, 1859, No. 11, pp. 207～42; No. 12, pp. 555～610. ラヴロフは1870年以來亡命生活をおくり、パリ・コンミュンにも参加した。マルクス・エンゲルスと親交があつたが、マルクス主義はとらず、主観的社会学の立場を保持した。
- (2) *Sistema logiki*. Translated from the fifth, supplemented London edition by F. Rezener. 2 vols. St. Petersburg: M. O. Vul'f, 1865～1867.
- (3) スカンランはここでロシア思想史の研究書を数種あげ、関連箇所の参照を求めているが、ここではその中から、邦訳のある二種の当該箇所を引用しておこう。「西欧の哲学と文学は、アレクサンドル一世とニコライの時代のあいだロシア人にきわめて強力に影響を及ぼしたのであるが、その影響は弱まるどころかイギリス哲学の活発な刺激によってさらに一層つよめられた。特にポジティヴィズムはロシアで多数の同精神の精通者を獲得した。フオイエルバッハのポジティヴィズムは、ゲルツェンやペリンスキーやバクーニンに決定的な影響を与えたのであるが、今やさらに、フランスやイギリスのポジティヴィズムの影響をうけて、特にオーギュスト・コントやジョン・ステュアート・ミルの影響をうけて一層練り上げられた。コントやミルにつづいて、スペンサーやダーウインの、一般に進化論者の諸著作もやがてポジティヴィズムの傾向を推進させたのであった」。Masaryk, T. G., *The Spirit of Russia*, Vol. I. 1955, p. 149. 佐々木・行田共訳『ロシア思想史』1, 1962, p. 122. 「1870年代には知的雰囲気が変

った。虚無主義の極端派は和らげられた。唯物論から実証主義への推移が起こった。自然科学の独占支配的地位は終った。ビュヒネルやモレシヨットはもはや顧みられなくなった。コント、ジョン・ステュアート・ミル、ハーバート・スペンサー等が左翼インテリゲンチヤに影響を与えた」。Berdyayev, N., *The Russian Idea*. 1947, pp. 112~113. 田口貞夫訳『ロシア思想史』, 1958, p. 136.

- (4) この点についてはソビエト科学アカデミー哲学研究所編『世界哲学史』IV, 1959, 第一章, 6 「1860~1890年代のロシアにおける論理学説」がくわしい。邦訳7, 1961, pp. 89~116. なお「西→清野→大西は明治(前期)論理学史における三つのピークであり, しかも彼等の間には帰納法論理学をとくに重視するという意味においても, 一本の基本ラインが引かれている」(船山信一『明治論理学史研究』, 1966, p. 67)が, 西周も清野勉も大西祝も, 共にミルの『論理学』を非常に重視していることは注目にあたいする。

§ 4 ミルの倫理学や政治学についての著作がロシアに及ぼした影響をはかることは一層むづかしい。『代議政治論』(1861)は1863、『論文集』(*Dissertations and Discussions*, 2 vols. 1859)は1864~65にそれぞれロシア語訳が出たものの, それらはその後一度も再刷されなかったし, おそらく検閲のせいであろう, ロシアの文献で論議されたあとが見られない。『功利主義』(1863)も1866~69に翻訳され, 1882にその再版が一度だけ出た。当時の急進的なインテリゲンチヤが功利主義につよくひかれていたことは事実だが, ミルのこの書物がこの引力の源泉となったという形跡はない。チェルヌシエフスキーの『哲学の人間学的原理』は『功利主義』の出版の3年まえに書かれている<sup>1)</sup>のである。これに反して『婦人の隷従』(1869)と『自由論』(1859)とはロシア人の強い関心の的となった歴然たる証拠がある。まず前者について見ると, M. L. ミハイロフが『同時代人』(1860, No. 11)にのせた「J. S. ミルの婦人解放論」によってロシアの人々はミルの見解に接していたが, ミルの社会哲学に最も近い立場にいたミハイロフスキーは1860年代を通じてこれをロシアに普及することに貢献した。1869年にロンドンで『婦人の隷従』が公刊されると, ただちに同年二種の翻訳があらわれたが, その中の一つにはミハイロフスキーの熱烈な序文がつけられていた<sup>2)</sup>。これは1870, 1906年に版を重ねており, 別の翻訳が1896に刊行されている。ミルの婦人論のこうした一般化は, 有名な保守的思想家 N. ストラーホフが1871年に書いた論難の書<sup>3)</sup>のような, 保守陣営から反撃をよびおこすほどであった。つぎに後者の『自由論』であるが, ロシアの民衆はこの書物のことをそれが刊行された1859年にA. ゲルツェンがロンドンで出しロシアに密輸入されていた雑誌『鐘』で知った<sup>4)</sup>。『自由論』はゲルツェンによって高く評価されたが, それに呼応するようにロシアの国内でも

1860年代初頭にラブロフやピーサレフによってしばしば言及された<sup>5)</sup>。だがゲルツェンにさざげられた最初のロシア語訳は1861年にドイツのライプツィヒで刊行され<sup>6)</sup>、ロシア国内での公表は1864年に雑誌『エコノミスト』に掲載されたのが最初であった<sup>6)</sup>。検閲官は最初その原稿を断乎として斥けた。それは「神のことであれ人間のことであれすべての事についての最高の審判として理性をまつりあげて」おり、一そうわるいことに「自由選択というプロテスタントの原理を知識の全領域と個人的ならびに社会的生活の全面に適用する」危険思想だというのである。だが後にこの判決はペテルブルク検閲委員会によって撤回され、委員会はこの訳語を若干の削除をして公表することを承認したが、それは『エコノミスト』が専門的な学術月刊誌であって、広く公衆の間に流布されるものではないという事情を考慮した結果であった<sup>7)</sup>。その後『自由論』のやはり削除のある他の二種のロシア語版本が1866～1869と1882に刊行されているが、一般的な刊行物でこの著作を同情的に論ずることは許されなかった。『自由論』の研究書でロシアで紹介された重要なものとしては、H. バックルの論文と J. F. スティーヴンの著作とがあるのみである。<sup>8)</sup> そして1882年から現在まで、『自由論』の新しい版本は一回もロシアであらわれなかった。現在ソ連の参考図書がミルの『自由論』に言及する場合、かつてそのロシア訳が出たことがあることは認められていない。たとえば最近出た『哲学百科事典』のミルの項には、ミルの他の著作についての初期のロシア語訳は列挙されているのに、『自由論』のそれは黙殺されているのである<sup>9)</sup>。

- (1) チェルヌイシェフスキーは『哲学の人間学的原理』(1860)のなかで、ミルのパンフレット *Thoughts on parliamentary reform*. (1859) を主たる材料にして、ミルの思想の特質を論じている。松田道雄訳、1955、岩波文庫、pp. 18～27, 34.
- (2) *Podchinyonnost' zhenshchiny*. Translated from the English with a preface by N. Mikhailovsky and with added letters from A. Comte to J. S. Mill on the woman question. St. Petersburg: S. V. Zvonarev, 1869.
- (3) Strakhov, N. N. *Zhensky vopros. Razbor sochineniya Dzhona Styuarta Milliya "O podchinenii zhenshchiny"* St. Petersburg, 1871. 43 pp.
- (4) ゲルツェンの「ジョン・ステュアート・ミルとその著『自由論』」は1859, 4, 15の『鐘』に、また同年の『北極星』第5分冊にのり、後に彼の自伝『過去と思索』第6部にも収録された。金子幸彦訳、筑摩書房・世界文学大系 83, 1966, pp. 265～272. ゲルツェンがミルのどの点とくに共鳴したかについては、勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』(1961)の第8章「ゲルツェンのナロードニチエストヴォ」、とくに pp. 366～367, 416～420, 465 を参照。

- (5) ラヴロフの『実践哲学概要』(1860)の中の『自由論』からの引用の一例については、チェルヌイシェフスキー『哲学の人間学的原理』、前掲邦訳 p. 15 を参照。
- (6) “O svobode”, translated by A. Longinov, in *Ekonomist*, 1864. これより8年後の1872年に、最初の邦訳が中村正直の手で『自由之理』として刊行されたが、この場合は society を「仲間連中即ち政府」と訳したり、冒頭のハリエットへの謝辞や、第三章の英雄崇拜否定論など、中村が不必要または不穏当と思う部分は削除しており、「ミルらしいあいまいさをきりすてて『自由について』を明治初年の日本にふさわしく単純化した」(水田洋, 河出『世界の大思想』ミル篇解説, 1967, pp. 450~452) 邦訳であった。
- (7) 1872年『資本論』第一巻のロシア語訳の公刊を許可したときの検閲官の判決要旨の中にも「叙述が決して何人にも理解可能のものとはいわれない」とあったことが想起される。Marx・Engels, *Werke*, 33. S. 492.
- (8) Buckle, H. T., *Etyudy*. Translated from the English under the editorship of P. N. Tkachov. St. Petersburg: Yu. Lukanin, 1867. 239 pp. Stephen, J. F. *Svoboda, ravenstvo, i bratstvo*. Translated from the English by M. Muromtsev. St. Petersburg: A. Benke, 1907. xxiv, 314 pp. バックルとスティーヴンのこの著作が、明治時代のわが国でもやはりあわせて邦訳されていることは興味ふかい。バックル, 土居光華・湊間真学共訳『自由之理評論』1882; スティーヴン, 小林菅智訳『自由平等論』1882, 内閣記録局訳編『自由平等親愛論』(『政治一斑』第五輯, 第九輯) 1891.
- (9) Tabanets, P. “Mill’, Dzhon Styuart”, in *Filosofskaya entsiklopedia*, Moscow, 1964, III, pp. 442~3.

§ 5 19世紀末までにロシアで紹介されたミルの著作は、以上の他に『教育論』(*Inaugural adress, delivered to the University of St. Andrews*, 1867) と『自伝』(2種の翻訳あり) であって<sup>1)</sup>、『経済学 試論集』(1844), 『宗教三論』(1874), 「社会主義論」(1879) などはロシアでは公刊されなかった<sup>2)</sup>ことになるが、今世紀に入るとミルの影響力は一路衰退の路をたどり、ソ連になってからはドン底におちてしまった観がある、とスカンランはいう。革命以後の50年間にチェルヌイシェフスキー著作集の中に『経済学原理』第一篇の翻訳がことのはずみに収録刊行された以外は、ミルの著作は何一つロシアで公刊されなかったし、ミルの思想のどの側面に関しても本格的な研究はなされていない。1953年のスターリンの死このかた、カント、ヒューム、ロック、ルソーその他多くの西欧の思想家たちの新しい翻訳が、あるものは何巻ものセットになってあらわれさえしたけれども、ミルの著作は今もってロシアの書店で入手することは不可能である。それははたして何故か。上来その要旨をたどってきたスカンランの一文は、この問いに対する彼の解答



をのべたパラグラフをもって終るのだが、この部分はおそらく彼自身の思想の表明でもあり、従って彼としては最も読んでもらいたいところなのだろうから、その全部を逐語的に訳出しておくことにしよう。「ソ連がミルを拒否するのは、一部分はマルクスとロシアにおける彼の使徒達によって一貫していかれて来たミルに対する低評価に由来する。マルクスは周知の毒舌でミルをつぎのようにかたづけた、『低い平地ではただの盛り土でも小山のように見える、同じように今日のブルジョアジーの低級な平板さは、その“偉大な知性”の高さによって計測されましょう』<sup>3)</sup>と。レーニンもミルを二番煎じの凡庸な思想家でありブルジョア弁護論者と考えた<sup>4)</sup>。こうした評価がソ連の全時代に一貫してなされてきた。たとえば現在よまれているソ連の哲学史は、ミルを『ブルジョア・イデオログ』とよび、その経験論は『未熟で』、その論理学は『首尾一貫せず』、その哲学的見解は一般に『限界があり』、その自由論は『公平な言いまわしのマスクをつけてはいるものの、プロレタリアートを搾取するブルジョアジーのための自由に対する要求にほかならない』<sup>5)</sup>とのべている。だがソ連の官憲がミルの著作をおさえているのは、その『ブルジョア的な』自由の擁護が共産主義のプロレタリアートの中によびおこすであろう攪乱的衝動を正確にみてとっていることにもよるのであろう<sup>6)</sup>。

- (1) “Rech’ Dzhona Styuarta Millya ob universitetskom vospitanii”, in E. L. Youmans, *Novyshye obrazovaniye, yevu istinnyye tseli i trebovaniya*. Translated from the English. St. Petersburg, 1867. *Avtobiografiya*. Translated under the editorship of G. Ye. Blagosvetlov. St. Petersburg: V. Pushkov, 1874, 332 pp.; Moscow: Khizhnoye delo, 1896, 280 pp.
- (2) 明治の日本では『宗教三論』が邦訳されている(小幡篤次郎訳, 二冊, 1878)。また「社会主義論」も翻訳ではないが、その論旨が島田三郎によって紹介されていることについては、杉原『ミルとマルクス』, 1957, pp. 251~253 を参照。
- (3) Marx・Engels, *Werke*, 23. S. 541.
- (4) レーニンのミル評価については、たとえば「市場理論の問題への覚え書」(1899, 大月書店版全集第4巻, p. 58) や、ホブソン『近代資本主義発達史』の書評(1899, 同上 p. 107) におけるミルへの言及を参照。
- (5) Dynnik, M. A., et al, eds. *Istoriya filosofii*. Moscow, 1957, II. pp. 208~10. 邦訳『世界哲学史』3, 1959, pp. 222~225.
- (6) *The Mill News Letter*, Vol. IV, No. 1, p. 5.

§ 6 最後にスカンランが文献目録のうちで Russian Works on Mill の (34) にあげているつぎの論説について一言しておきたい。I. N. “Vozrazheniya na ekonomiche-

skoye ucheniye Dzhona Styuarta Millya". スカンランはのべていないが、この筆者はジーベル(1844~1888)で、彼がその頃よく執筆していた雑誌『言葉』の1879, No. 7, 139~78; No. 8, pp. 75~120 にこの「J. S. ミルの経済学説に対する反駁」も掲載された<sup>1)</sup>。まえがきでジーベルは、この論説が1869年に出了小冊子の翻訳であるとのべているが、原本のタイトルもその著者の名前もあきらかにしていない。しかし13節より成るその内容から見て、底本がエッカリウスの『ジョン・ステュアート・ミルの経済学説に対する一労働者の反駁』<sup>2)</sup>(1869)であることはあきらかである。原本の緒言と結論の部分は省いてあるほか、本文の中でも、論旨の本筋には関係のうすい部分や感情的な表現の箇所は削られている。ジーベルは冒頭でエッカリウスのこのミル論の論理的一貫性を高く評価している一方、著者のミルに対する敵意はミルの労働者階級に対する温かい誠実な態度にかんがみると不公平なところがあるとのべており、ジーベル自身のミル評価がうかがえて興味ふかい。ジーベルとマルクスとが互いに他の業績を認め合っていたことは、『資本論』第1巻第2版後記の中の、ジーベル『リカードウの価値および資本に関する理論』(1871)についてのマルクスの敘述<sup>3)</sup>からもあきらかであるが、この著述の中でマルクスの経済学を高く評価しているジーベルが、マルクスの立場をミルのそれに対置せしめつつミルを批判したこの小冊子に注目したこと、そしてこれをミルの『経済学原理』が上述のように普及しているロシアで紹介しようとしたことは自然であろう。この紹介が『言葉』に発表された翌々年の1881年1月に、ジーベルはロンドンにマルクスを訪ねている<sup>4)</sup>が、エッカリウスのミル批判のロシアへのこの紹介のことも、あるいはその時の話題にのぼったかもしれない。

(1) 『ロシア経済思想史』第2巻第2部(1960)のp. 635でもこれをジーベルの論文としているが、ここでは『言葉』のNo. 7とNo. 9と(ページ数は同じ)に掲載されたことになっている。なおこの論文はジーベルの二巻選集の第2巻(1959)に収録されている(pp. 471~553)。

(2) Eccarius, J. G., *Eines Arbeiters Widerlegung der national-ökonomischen Lehren John Stuart Mill's*. 1869. 倉岡稔訳, 改造社版マルクス・エンゲルス全集, 第16巻(1930)に所収。これははじめロンドンで出ている雑誌『コモウニール』に1866年から1867年にかけて英語で連載されたが、その場合エンゲルスが後年友人への手紙でふれているように(*Werke*, 36, S. 408), マルクスがエッカリウスの執筆をたすけた。この点については杉原『ミルとマルクス』pp. 183~189を参照。最近の文献ではつぎのものがこの点にふれている。Herrmann, U., *Der Kampf von Karl Marx um eine revolutionäre Gewerkschaftspolitik in der I. Internationale 1864 bis 1868*. Berlin, 1968. S. 154~157.

(3) Marx・Engels, *Werke*, 23, S. 22, 25.

(4) *Werke*, 19, S. 618 ; 3b, S. 157.

附記 ロシア語文献について同僚の松岡保氏から種々の助言を得た。記して謝意を表す  
る。